

公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団セミナー

第4回環境シンポジウム

「アジアの経済発展と環境問題」

事例発表1

インドネシア・エビ養殖地河川流域住民による環境整備活動

<申請者>

オルター・トレード・ジャパン社 インドネシア駐在員

津 留 歴 子 氏

<事例発表者>

株式会社オルター・トレード・ジャパン 代表取締役社長

上 田 誠 氏

上田 皆様、こんにちは。今ご紹介にあずかりました株式会社オルター・トレード・ジャパンの代表をしております上田と申します。本日はよろしくお願いたします。

今日はこちらの財団で助成していただいている、インドネシアのエビ養殖地域の河川流域での住民による環境整備活動についてご紹介させていただきたいと思ひます。

この活動の紹介をさせていただく前に、私たちはなぜこれを行っているかを簡単に説明させていただければと思ひています。私は株式会社オルター・トレード・ジャパンとご紹介させていただきました。通称 ATJ と呼んでいますが、ATJ は 1989 年に生活協同組合と、市民団体によって設立された株式会社です。

その目的は、アジアの小規模生産者と日本の消費者との産直提携に基づいてさまざまな産品を直接取引する事業です。様々な地域で活動しているのですが、フィリピンではバラゴンバナナとマスオバド糖、東ティモールとラオスではコーヒー、それからパレスチナからはオリーブオイル、最近ではインドネシアのパプア州では生産者が作っているカカオを取り扱っています。

今回ご紹介するのは同じインドネシアで、粗放養殖という昔ながらのエビの養殖をしている生産者と一緒に取り組んでいる事例です。エコシュリンプという名前で、消費者にお届けしています。そのエコシュリンプを現地で作っている現地法人のオルター・トレード・インドネシア、通称 ATINA という事業体です。その ATINA が今回エコシュリンプの生産者の人たちと共につくった団体が、この KOIN という団体です。

ちょっと前置きが長くなりましたけれども、そのような経過の中で今回私がこの KOIN の活動を皆様にご紹介させていただくことになりました。この KOIN は、急激な環境変化がある中で、自然と共生しながらエビの養殖を持続的に行いたいという生産者の強い思いから組織され、ATINA もそこに一緒に入ることによって、地域の活動として取り組みを進めています。

こ対象地域は、クドゥン・ペルク村です。東ジャワ州シドアルジョにある 1000 世帯ほどの村です。皆さんよくご存じなのはこの地図の一番右側にあるバリ島というところですが、バリ島から飛行機で 1 時間ぐらいのところにあるシドアルジョという町です。

シドアルジョは、エビとバンデン（ミルクフィッシュ）の町と呼ばれるくらいエビの養殖が昔から続いています。養殖の近代化がなされたのは 1970 年以降ですけれども、この地域一帯には昔から地域の特徴、河川の特徴を生かした養殖が、本当に古いものだと 200 年前とか 300 年前くらいからやっている歴史的なところがあります。そのような地域で今回、新

たな活動を始めました。この地域の大きな問題に、ごみ処理問題があります。ごみを適切に処理するという意識は低いのが実情です。ごみの処理というのは各個人が行い、共同回収システムではありません。これは必ずしもこの地域に限ったことではなく、インドネシア全般についてもかなり言えることですが、今回我々が一緒にプロジェクトをやるようとしている地域ではこのような状況にあるということです。

この村を上から見るとこのような感じです。ちょうど田んぼみたいに区切られた地域がエビの養殖の地域です。それと、見て分かるとおり、住宅地が隣接しているという状況です。このあたりは後ほどまた触れたいと思いますが、前提の概要としてはそういう地域でやっているのご理解いただければと思います。

今回の活動の目的では、生活環境の改善がまず目的としています。家庭のごみを適正に処理して生活環境を良くする、環境に関する住民の意識を向上させる、そして、流域河川の環境を改善することを目指していきます。まずはごみの共同回収作業を通じて住民の意識を高めていくことが取り組みの鍵になっています。

ごみの川への投棄がかなり深刻な問題です。先ほどの地図のとおり、養殖池は住宅地が隣接しているような状況です。つまり、将来の水環境の状況は最終的に河川から水を摂取しているエビ養殖にも大きく影響する、という環境にあるということです。ごみ問題への取り組みはエビ生産者の問題であるという意識で取り組まないと自分たちのエビ養殖というものが次世代に引き継げなくなる化可能性もあります。その点から見ても、今回のプロジェクトはとても重要な意味を持ちます。

この取り組みは、今年の4月から始まっています。主な活動として、三つ報告させていただきたいと思います。

まずは家庭の廃棄物のマネジメントです。対象地域の住民に環境ワークショップを兼ねたプログラムの説明会を行い、各家庭を回って説明を行って、ごみの共同回収の意識を高める。ちょっと順番が前後しますが、我々日本人にとってはごみの収集というのはごくごく当たり前のことで、何曜日は燃えるごみ、何曜日は燃えないごみというようになっていて、当然のように擦り込まれています。

けれども、この地域にはそういうものはありません。先ほど個人でやっていると言いましたが、具体的にどうやっているかと言うと、当然ごみは出るから、各個人のところで当然集めるわけです。地域にはごみの集約場所のようなところはあるのですが、そこに持っていか持っていないかは個々の状況次第になるわけです。持っていく途中でどこかに

捨ててしまうということもあるだろうし、ごみそのものを川に捨てることもあります。そのような状況の中で、ごみ処理のマネジメントというものをどうやって定着させるか、まずは対象地域の住民に説明会を行うところから始めました。この説明会の対象はエビ生産者です。その一方で、生産者に対する全体の説明だけではやはり不十分だという認識があります。エビ生産者は男性が多く年配の方も多いです。もちろん、その人たちができるかできないかという問題ではなく、はっきり言ってしまえば、家庭のことということであれば当然そこには女性に入ってもらうことで、家庭、世帯ごとのマネジメントにつながる可能性が高いということです。

だから、各家庭をきちんと回って、なぜこれをやるのかということを中心に説明する必要がありました。家庭に行けば子どももいるし、若者もいるし、家庭ぐるみでこの問題に関わっていくというところからまず意識を高めていく。つまり、まず参加者の意識を高めるということから始めました。

次は提供するということです。参加しているのは70世帯ぐらいなのですが、ごみの回収箱をまず提供しました。ごみの回収箱を提供すること、本当にシンプルなことなのですが、ごみを捨てる場所を決めるということなのです。それをまずきちんと徹底させることがとても大事です。この作業を習慣化することが、実は次の回収することにつながるのです。

ですから、初めは皆さんに意識してもらうことから始まり、その次にその仕組みをつくる。仕組みを導入したところに、必ずこの曜日には取りに行くからという流れをつくる。そのことで、例えば、その日にごみが収集されていなかったらなぜできなかったかきちんと聞き取りして、次はちゃんと出してくださいと言う。

つまり、PDCAですね。計画して、実際にやって、チェックするというのを仕組み化することで、少しずつ意識化して、当たり前のように行動する。それをすることがもう当然のようになっていく。そういう活動を通じて意識・行動を高めていきたいということです。

これ以外の活動として、学校での環境学習会というものをやっています。この活動は見ただけだとおもしろいのですが、私たちにとってこの学校での環境学習会というものはとても大きな意味を持っています。ちょっと話がそれるのですが、今、インドネシアはアセアン諸国で優等生として抜き出ている経済成長の中の国です。

そのような中で実は、もう一方の称号をもらっています。世界でも有数の川の汚い国と

いう称号です。そのような称号は一般的には知らされていないわけです。しかし、学習会で例えば、そのインドネシアの河川の状況の写真を子どもたちに見せると、どこか分からないと言うのです。でも、これが自分たちの国だよと言った瞬間、驚がくするわけです。そのようなところからやはり自分たちの国、自分たちの環境というものに対してきちんと意識をして、守っていきたいというところをきちんと子どもたちに分かってもらうことは、とても大きな意味を持ちます。

また、インドネシアの人口構成は日本と真逆で、10代から20代、そして30代がいま相当な人口比率を占めている。その中で若者たちが環境を意識していけば、今の経済成長の先にあるインドネシアの姿が少なからず変わってくるだろうとみています。これが私たちの考えていることです。

話としては大きいですがけれども、我々はまず身近足元で、我々と一緒に仕事をしているエビの生産者およびその人たちが住んでいる地域、で小さくてもいいからまず地道に取り組みを根付かせていきたい。という思いで学習会をやっています。

また、エビの養殖に関係が深いのがマングローブの植林です。このあたりはもともとマングローブの湿地帯が豊かにあった地域です。他のエビの養殖に比べれば、マングローブとの共生は比較的行われてきた地域なのですけれども、それでも先ほどからお話に出ています。拡実際に減少している経過地域でもあります。そういったことも含めて、マングローブの植林をきちんとしていこうということはずいぶん前からやっています。

けれども、マングローブの植林は、決してマングローブの木をなくしてはいけないということだけではないのです。マングローブがあることで生態系が豊かになるし、また、マングローブの木があることで、例えば、雨風が強く吹いたときにその防風林としての役割も果たすため、その有無で影響が変わります。

そういった意味で、マングローブの持つ経済的価値、投資的効果と言ってもいいと思いますが、この点を考えれば、なぜマングローブというものが大事なのかということは日々感じている地域です。こういった養殖と併せて、ここで活動をしています。

今後の課題は、ごみの収益化ということです。そもそも、ごみを出すという行為がまだ定着していないので、まずそこからしなければいけません。日本でも実際にもう定着していますけれども、ごみがちゃんと出されるようになってくると、次にリサイクル・リユースというかたちで分別をしていくことになります。

この作業を適切にやることで、リサイクル業者に出てくるごみが売れるようになるだろ

う。そこから収益というものをきちんと上げながら、このプログラムをモデル化し、ある程度そこで人材を育成してその他のコミュニティーにきちんと広げられるよう、財政的にも人材的にもきちんと育てていく必要があると考えています。

特にこのような活動を進める中でエビ養殖を引き継ごうとしている若者世代が地域に誇りを持って自分たちの商売、養殖というものにきちんと未来を持ち、また、その地域で自分たちの問題を考えていくという意味でも、こういったプロジェクトを広げていくことはとても重要と考えています。

第1期以降の活動は、以上のことを積み上げながら活動地域広げていきたいと思っています。、現時点ではこの取り組みがはじまったばかりですが、方々からかなり注目を浴びています。確か、日本でも同じ地域で行政と手を組み、北九州市が一緒にごみ処理などの取り組みをしていると聞いたことがあります。そういった側面で、地域は地域でやるのですけれども、この地域でやっていることを当然行政レベルでもきちんと考えてやってもらいたいというのは、当然思いとしてはあります。

そういうことも含めて、このエビの養殖の生産者とこのあたりの県政府の人たちとの話し合いということも含めて、やはり環境と経済の問題はきちんと成立させていかなければいけないと思っています。

エビの養殖の生産者からすると環境って何という話なのですけれども、そういった人たちが一つ意識して動くだけで、それ以外の全体の経済を循環させ、活性化させて、発展させていく。そのような事例の一つになると我々も期待しています。取り組みは今日はありがとうございました。(拍手)